

Title	一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン(II)
Sub Title	The function of Meidan in the 19th century Isfahan (II)
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.145- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文 タイトル : 一九世紀イスファーハンの都市構成とメイダーン(II)
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九世紀イスファーハンの都市構成とメイダーン（Ⅱ）

坂本勉

三住民構成

(1) 人口

一九世紀の人口にかんしても、とも古い統計をつたえるのは Coste である。かれは一八五〇年前後の人口として八三五〇戸（ムスリム）+一二〇人（ユダヤ人）という数字を挙げている（→付表I）。ついでJEは五万人がイスファーハンの人口の概算であることを示した。JEは戸数ではなく人数で示したところに特徴があるが、これに加えてサファヴィー朝からカージャール朝に至る人口動態の推移を次のように述べている。すなわち、サファヴィー朝後期に七〇万人を越えたイスファーハーンの人口は、カージャール朝期になって減少し、ファトフ・アリー・シャー（一七九七—一八三四）の治世中期に二五万人、モハンマド・シャー（一八三四—一八四八）の治世初期に一七万人になった。このような減少の傾向はその後もとまらず、飢饉、伝染病、暴動によって加速され、JEのつたえるように五万人以下の人口にまで落ちこんだのである（JE六五頁）。

ところで、以上のような断片的な情報のほかに正確な人口調査資料が残されている。それは一八八二年、イスファーハン州知事ゼッロル・ソルターンの命令で調査が実施されたセンサスである。特別の役人とマハッレのキャドホダーとが、

それぞれ別個に独立に調査を実施した。この二つの調査の前後関係は、はつきりしない。仮に第一調査、第二調査と名づけておくが、後者は命令によらない自発的な調査であったといふ。

このセンサス原簿は長いあいだ所在不明であったが、現在、ペルシャ大学経済学部のパークダーマーン教授の所蔵に帰し、銳意研究中であるともいへ。したがつて、原簿そのものを見ることなどできないが、幸いなことに Houtoum-Schindler がこのセンサスについて言及しているので間接的に知ることができる。⁽³⁷⁾ Houtoum-Schindler はイングリッシュペルシャ通信会社 (Indo-European Telegraph Company)、ペルシャ通信事業会社 (Persian Telegraph Service)、ペルシャ帝国銀行 (Imperial Bank of Persia) の駐在員を歴任したドイツ系イギリス人である。かれはイラン滞留経験が長く、屈指のイラン事情通として名高い。

この Houtoum-Schindler が一八九六年に出版した自著の中で、イスファハーン州知事ゼツロル・ソルターンからじかにセンサスの原簿をみせられたとしてセンサスの一部を転載している。これによると、第一調査の結果は総戸数九、六一六戸、総人口七三、七八五人（男三七、五九七人、女三六、一八八人）であった。第一調査は総戸数九、五七二戸、総人口七三、五二六人（男三七、四六二人、女三六、〇六四人）であった。⁽³⁸⁾

この数字は NJ の挙げる一万戸という戸数にほぼ一致する (NJ 五八頁)。これは偶然によるのではない。前述したように NJ は、一八八一年に Mer'at al-Boldān の一部として編集の命ぜられた地誌である。同じ年にセンサスの調査も実施された。この一つはナーセル・オッ・ディーン・シャーが実施したイラン全土の調査事業の一環として同時に行なわれたに相違なく、したがつて NJ はセンサスの数字にもとづいて一万戸という概数を記したと考えられるのである。

以上から一九世紀の人口は次のように推移したと考えることができる。ファトフ・アリー・シャーの治世における一五万人の人口は減少の一途をたどり、モハンマド・シャー治世に一七万人、Coste の調査した一八五〇年前後に八、三五〇戸 + 一一〇人、そして JE の執筆された一八七七年以降、五万人以下にまで落ちこんだ。しかし、この激減の傾向は五

万人を底としてその後、上向き、一八八二年には約一万戸、七四、〇〇〇人近くにまで人口は回復しつつあつた。

(2) ユダヤ人

イスファハーンの住民はほとんどムスリムから構成されていたが、少数のアルメニア人、ユダヤ人がそれぞれ居留地をつくりていた。アルメニア人はサファヴィー朝期にザーヤンデルード河の南のジョルファ地区(→付図IIのV)に強制移住させられた。しかし、一九世紀においてこの地区は市域の縮少の結果付図IIのX、Y、Zの諸地区とともに行政上、市街地(shahr)からはずされたので、アルメニア人についてはここで扱わないことにする。

ユダヤ人はイスファハーンの都市創建期すでに歴史に登場する古い住民である。少し新しい資料であるが、一九二一年にイスファハーンの略史を著した Haydar-'ali はユダヤ人の移住の事情を次のように誌す。すなわち、

「ネブカドネザルはユダヤ人の集団をイエルサレム、シリアからイスファハーンに移住させた。Jūybāreh 地区をユダヤ人の名前にちなんでつくれた。イスファハーンは一時、Dār al-yahūd であったといわれる。今でもユダヤ人が住んでいる」。

この移住伝説の真偽はともかく、ユダヤ人がかつて、現在のイスファハーンの市街地の北東部に一大コロニーをつくりていたことは事実のようである。アラブ征服の直前、前述したように Yahūdiyya と呼ばれるイスファハーンのあとになつた町を形成していたのである。これの名残りは一九世紀でもみられた。付表I、および付図IIによれば E + D → [7 + 8] がユダヤ人のイスファハーン移住後、最初に住みついた Jūybāreh (Jūbāreh) 地区の一部であるといわれている。JEによれば、Jūybāreh 地区はもとは九つの地区からなる一大コロニーであったが、一九世紀には荒廃し、二つの地区が残るだけであったという (JEIII-1三三頁)。この他、西に隣接する B → [2 + 3]、C → [4 + 5 + 6] の二地区にもユダヤ人の居留地があつた。しかし、Coste の挙げる数字からも分るように、僅か一二〇人のユダヤ人が全部で三つの地区に分散して住んでいるのが実情であった。

ユダヤ人は、ムスリムの恥み嫌う不淨の仕事に従事する者が多かつた。JEによれば、とくに練縄の仕事 (abrishom-kār) はユダヤ人の独占であつて、綿織物師、メシュー織物師、レース職人に練縄を卸していったところ (JE 1〇八頁)。

(3) 定住遊牧民

イスファハーンのムスリム住民の構成をみると、遊牧民の比率がきわめて高いことに気がつく。イスファハーンに限らず一般的に遊牧民の存在とその役割が大きいことはイランの都市社会を特徴づけるものであつたといつてよい。したがつて、まずJEの遊牧民にかんする部分を訳出し、それにせつながらしくつかの問題点を述べてみると (41)。

「定住している遊牧民 (ilāt keh shahrneshin mibāshand)」

かれらは最初、人質 (rahā'in va gerougān) として連れてこられた。時が移り、子供が生れ、人数の多い集団になつた。今、部族生活 (iliyat) カの離れてくるが、依然として自分たちの言葉も忘れていない。町の言葉もしゃべるし、自分たちのもとの言葉も話す。(次の) 六つの集団 (ṭāyefeh) からなる。

① Darb-e Kūshēk 地区のトルコ族 (Atrāk) の集団。

人数は普通である。Darb-e Kūshēk 里に住んでくるかれいの仕事は乳酪 (māstbandi)、羊飼い (chubdāri-ye gūsfand) である。町の中でもたぐいの牛と雌羊 (mish) を飼育し、手づくりの飼料をあたえる。乳とヨーグルトを売っている。イスファハーンのヨーグルトはたいそう評判がよく、その州にもないものである。ことに冬の季節はカルカルの草を食べる雌羊の乳が、冬の四〇日間出まわる。

イスファハーンの町に居住地 (neshimangāh) のない他の多くの部族は、夏當の時になると、この町のはずれのところにまで下りてくる。かれらは町と村を行ったりきたりし、ものを買つたり売つたりしている。すなわち、バフテヤーリー族、ファールスのカシュガーラー族、クルド地方のガルース族がそれである。この三部族は羊を連れてきて、

(弋りに) おかねと織布、その他の品物をもつてゐる。

② ハルジ族 (Halj) の集団。

昔から住んでいて人数が多かつたが、今は少い。ムカリ・オ・ガーダル (mokārī o qāterdar) を業とし、年中、國々を旅してまわっている。

③ ランガネ族 (Rānganeh) の集団。

(ルの) 集団は以前にもいた。すげて、小さな貿易 (kerāyekesh-e olāghdār) をしている。近年、またたく間になくなってしまったが、少しは残っている。

④ コリーナーイー族 (Kolīnā'i) の集団。

かれらが属するむとの部族がどこから来たのかは不明である。特別のペルシャ語方言を話す。かれらの居住地はビダバード (Bidābād) 地区である。以前は人数が少かつた。悪事を働いたり、物乞いをしていた。今は多い。富裕である。行商 (pilehvar)、商人 (tājer) をしている。たびたびイスタンブールやイスファハーン以外の州へ出かけていき、儲けを得ていた。

⑤ ロル族の分派で古くから定住しているベフテヤーリー族の集団 (fāyefeh-ye qadīnī-ye alvār-e Bakhteyāri) [バフテヤーリー]、「古バフテヤーリー」と訳記。

人数の多い集団である。イスファハーンの三地区——Jūzdan' Lonbān' Sha'ish を占拠している。かれらの仕事は

村と部族の間を往来する行商 (pilehvari)、販賣 (kerāyekash)、鹽器 (kalak o tāpūsāzī)、農業 (zerā'at)、町の周囲にわらがる村々の田畠 (mozdvari)、その他である。一部の男たちは州政府の奴隸軍 (gholāmān-e dīvānī)、官吏 (noukerān-e velāyatī) として傭われてゐる。勇敢に馬をおやつる人がかれらのむんにはいる。指導者は、Hājī Kalb'ali Khān と Hājī Hāshem Khān の子供たれである。

(6) バフテヤーリー族のうち漸々定住した集団 (fāyefeh-yē jadid-e Bakhteyāri)。

モハンマド・シャーの時代、故 Manūchehr Khān Mo'tamed al-Dowleh は人質を連れてきた。子供が生れ、人数の多い集団になつたが、古くから定住してゐる部族にくわぐねむ少い。11つの地区に住んでゐる。かれらの仕事は村の収穫の手伝 (ḥasādgharī)、町の運送業 (khammālī)、それに類したじうである。書くにたる部族指導者はいなし。

(4) 言語と居住地区

右に訳出した記事からイスファハーンに定住するようになつた遊牧民像を整理してみるとしよう。まず、言語の面から遊牧民は部族生活 (iliyat) を離れるようになつたとはいへ、依然として血筋の出身部族の言語を保持していた。しかし、同時に町の言葉であるペルシャ語・イスファハーン方言を使うことでもできたからある意味でバイリンガルの生活を送つてゐた。言語を基準に遊牧民の民族区分をすれば、①がトルコ系、②、③が不明、④、⑤、⑥がペルシャ系であった。⑤、⑥はバフテヤーリー族で、JE はこれをロル族の分派であると見なし、ロル方言 (Lori) を使っていたとする (JE 一二八頁)。

人数は集団ごとにばらつきがある。②のハルジ族と③のランガネ族の人数はきわめて少ないとされている。この11つの遊牧民の集団は民族系統も不明とされており、一九世紀後半にはイスファハーンの都市社会に埋没しつつあつたのであらう

か。①、④、⑤、⑥は人数が増えつつあるが、すでに人数の多い集団であった。この点は各集団があまつたマハッレンをもつていたことに反映されている。①のアトラークは、町の中央部からやや北西の Darb-e Kūshēk 地区（→付図IIのG）に住んでいた。④のコリーナーイー族は町の北西、Bīdābād 地区（→付図IIのF）に住んでいた。⑤の古バフテヤーリーは三つのマハッレンに住み、Sha'ish 地区、Jūzdān 地区、Lonbān 地区がそのマハッレンであった。（→付図IIのF、③、N）。⑥の新バフテヤーリーは、一地区に住むという記事がJEにあるだけで具体的なマハッレン名は記されていない。

以上、イスファハーンにおける遊牧民の定住地の分布をみて振りくんとは、町の西、ないし北西に位置した、人口数の多い有力なマハッレンであったということである。付表Iによると、④、⑤の遊牧民の住む Bīdābād 地区はイスファハーン最大の一、三五〇戸をかかえるマハッレンであった。重要なは単に人口規模だけに限らない。次章で述べるように Bīdābād と Lonbān の両地区にはそれぞれ有力な小バーザール (bāzārcheh) があり、流通機構の上でも大きな役割を果していた。

イスファハーンの市街地の西、北西のマハッレンが遊牧民の居住地区に選ばれた理由は、第一に部族地域に近かつたことによる。しかし、むしろ第二の理由として一九世紀後半以降に展開したイスファハーン西部の近郊地域の発展を考えるべきであろう。とくにバフテヤーリー族の遊牧地に接するチャハール・マハール地域の農業開発は遊牧民とイスファハーンとの関係を深めた。⁽⁴²⁾ 古バフテヤーリーの居住地区である Jūzdān が村からマハッレンに昇格したことの意義は、以上のようないきなりつてあつた人口移動の点から評価すべきである。JEによれば、Jūzdān 地区は古バフテヤーリーの新しい居住地区で、特別の kadkhodā はないが、指導者として Hājī Mōhammād Ṣādeq Bik' Mollā Naṣrollāh の nāyeb をつとめていた (JE 一一六頁)。

(5) 定住遊牧民の仕事

まず、①のアトラークがおこなつていた牧畜がある。かれらは牛と雌羊の飼育、乳酪づくり、羊追いをおこなつていた。これは遊牧でなく、市街地の *Darb-e Kūshēk* 地区で恒常的におこなわれていた牧畜であった。JEがカシュガーヤー、バフテヤーリー、クルド系のカルースの三部族の遊牧と対比させてアトラークの牧畜について説明していることを想起してほしい。夏営時に商取引のためにイスファハーンに下りてくるのではなく、定住して牧畜をしていたのである。しかし、いずれにしろ、州政府の北西に隣接する地区で牧畜がされていたといふことは一九世紀の市街地のあり方を象徴している。

定住遊牧民のあいだで比重の高かつた職業に運輸業がある。これはかれらの故郷の部族地域が有数の駄獣の産地であったことと関係する。貨ひわ (kerāyehkash→古バフテヤーリー)、荷かひわ (hammālī→新バフテヤーリー)、いば曳き (mokārī o qāterdār→バルジ族)、いばの貨ひわ (kerāyehkash-e olāghdār→ランガネ族) が具体的な運輸業の業種であった。これらは名前がちがうだけでなく、流通過程においてそれぞれ役割分担があった。これについては小バーザールとメイダーンの流通機能との関連で後述する。

Bidābād 地区に住む古バフテヤーリーとコリーナーイ族はじゅうらむ行商 (pilehvar) を営んでいた。後者のコリー族はイスファハーン州の外にも商圏をもち、オスマン朝の首都イスタンブールとの間を往来する商人 (tājer) としても知られていた。行商の実態は、JEに定住遊牧民が村と遊牧部族のあいだを往復するとあるだけで必ずしもあきらかでない。

しかし、一八九一年にバフテヤーリーの部族地域を旅行した Bishop 女史の報告は行商のあり方に若干の示唆を与えてくれる。彼女はイスファハーンからバフテヤーリーの部族地域を通り、フージスタンのシユースタルまで旅行した。このとき、彼女はイスファハーンの南西八五マイルのところにある Ardal 村に立寄った。ここにはバフテヤーリー族の有力な三家系のひとつ *Hājī īkhānī* 氏の 'Imām Qoli Khān の館があった。Bishop もこの館に面して軒を連ねる

アーケードの店に「イスファーハーンの商人が一ヶ月間、ここに来て品物を並べる」と伝えるが、このことはバフテヤーリーの族長層がつくつた常設の市場に一定期間、商人が滞在するという行商の一つの形態を示すものであろう。

この他、定住遊牧民のたずさわった仕事に陶器づくり、農業および農作業の日雇い (mozdvari→古バフテヤーリー)、収穫の手伝い (hasadghari→新バフテヤーリー)、奴隸軍人 (gholamān)、官吏 (noukerān→古バフテヤーリー) があつた。これらの業種は遊牧民の定住化の事情に關係するので、次にこの点について触れたい。

(6) 部族政策とバフテヤーリー遊牧民

遊牧民が定住化するにいたつた直接的な契機は人質として強制的に移住させられたことであった。周知のようにカージャール朝支配下のイランには三〇%以上の広大な面積を占める部族地域があつた。それはファールス、バフテヤーリー、フーズターン、コルデスター、ホラーサーンの辺境地帯、アゼルバーアイジャーン、バルーチエスターの諸地方に散らばつていた。⁽⁴⁴⁾ カージャール朝にとつて部族を掌握し、秩序を確立することは支配体制の帰趨を決する重大な鍵をなしていた。事は部族政策という言葉で片づけられる性質のものでなく、実はカージャール朝の部族連合的ともいえる国家構造の根幹にかかわっていたのである。

カージャール朝は族長を通じて間接的に部族を統治する政策をとつた。族長に一定地域の支配権を委ね、その見返りに恭順の保証として部族から人質をとつたのである。バフテヤーリー族の場合、ファトフ・アリー・シャーの時代に数家族がテヘラン近郊の村に人質として強制移住させられた。⁽⁴⁵⁾ もつとも、人質を出す単位が何であつたのかは現在の研究水準では必ずしも明らかでない。部族を構成する諸集団、各部族の政治的統一の時期、族長権の確立とその内容が各部族においてまちまちで、かつ不明なことがその原因の一端をになつてゐる。

人質はある点でカージャール朝の兵役制度と重なつてゐた。土地を下賜されたトユール保有者は兵役の義務を負つたが、同じように部族地域において免税特權を認められた諸部族も兵を首都のテヘラン、州政府の所在地に送らねばならな

かつたからである。⁽⁴⁶⁾ かくして、遊牧民は人質、兵役との関連で特定の都市に居住し、結びつきを深めていくことになった。カシュガーリー族とシーラーズ、アフシャール族とケルマーン⁽⁴⁷⁾、クルド族とマラーエル⁽⁴⁸⁾、バフテヤーリー族とイスフアハーン⁽⁴⁹⁾と、さういうように遊牧民と都市との特殊な関係が生じてくることになった。イランの都市はカージャール朝と遊牧部族との支配＝被支配の関係が具現する結節点であった。

以上の点をバフテヤーリー族とイスフアハーンとの関係からみてみよう。もし、バフテヤーリー族がカージャール朝権力を握るようになったのは、ようやく第一代のファトフ・アリー・シャーの治世にはじめてからである。Rouzat al-Safā によれば、イスフアハーンの州政府のワジール 'Abdollāh Amin al-Douleh⁽⁵⁰⁾ が、バフテヤーリー族の Hājī Rajab 'alī Bakhteyārī を Lorbān⁽⁵¹⁾ 地区に人質として移住させたのがはじめであるといふ。これが何時のことだったかは明確でない。しかし、人質政策の推進者であった 'Abdollāh Amin al-Douleh が父の Hājī Mohammad Hoseyn Khān-e Eṣfahāni-ye Ṣadra'zam のあとを継いでワジールに就任したのが、一八二三／一四〇（一一一九 A・H）年で、⁽⁵²⁾ あつたので、この年以後にバフテヤーリー族の定住があつたと想われる。これはバフテヤーリー族にとって最初の強制移住で、この集団が J.E の讃す「ロル族の分派で古くから定住しているバフテヤーリー族」（＝古バフテヤーリー）に該当するらしいとは疑問違ひない。J.E はかれらの居住地区として Lorbān, Sha'ish', Jūzdān の三地区を挙げるが、既述の引用記事と指導者 Rajab 'alī のニスバが Lorbān であるとか、かれらの一八一〇年代における最初の居住地区は Lorbān 地区であったと考えることが適当のようである。おものが Lorbān 地区はその後の人口増加によって居住地区になつたものである。

イスフアハーンに定住するようになった古バフテヤーリーは、人質といつても侮れない存在であった。ワジールの Amin al-Douleh は指導者 Rajab 'alī Khan の娘を娶り、懷柔にひとめだ。しかし、このような通婚政策にもかかわらず、古バフテヤーリーのイスフアハーン州政府にたいする服従は完全でなかつた。はやくも一八二四／一五年に J.E が

「無智で傲岸不遜」(JE七四頁) と詰めの Hāshem Khān が反乱をおこしたからである⁽⁵²⁾。かれは Rajab'ali Khān の次子であったが、ファトフ・アリー・シャーの征討軍に鎮圧され、田を抉りとられる刑に処せられた(JE七四頁)。

第三代のモハンマド・シャーの治世においても対バフテヤーリー関係は安定しなかつた。⁽⁵³⁾ 一八四一年にはイスファハーン州知事がバフテヤーリー族の Mohammad Taqī Khān を暗殺する事件がおきた⁽⁵⁴⁾。こうしたこと背景に時の州知事であった Manūchehr Khān Mo'tamed al-Douleh は、バフテヤーリー対策を強化し、再び、人質を送るよう要求した。かくして、一月の間、「ロル族の分派で新しく定住したバフテヤーリー族」(=新バフテヤーリー) が新たにイスファハーンの一地区に住みつくようになったのである。これはバフテヤーリー族の第二次の集団移住であったが、有力な指導者もいらず、イスファハーンの都市社会内部で勢力は大きくなかったといわれる。これにたいして、古バフテヤーリーの集団は既に第二世代にはいっており、JEが「完全無欠の男」「イスファハーンの貴族 (arkān)」(JE七四頁) と評する Hājī Kalb'ali Khān (Rajab'ali Khān の息子) に指導されて結束を固め、イスファハーンで隠然たる力をもつていた。

一九世紀半ばはバフテヤーリーの種族史にとって一大転機であった。これ以前、バフテヤーリーは Haft Lang' Chahār Lang の二つの集団 (tireh) に分裂していたが、Hoseyn Qoli Khān はこれを統一し、全体を il (種族) という政治的集団を組織した。そして、族長権 (ikhāni) もこの時に確立した⁽⁵⁵⁾。しかし、イスファハーン州政府が ilkhāni を公認するのは一八六七年になつてからである⁽⁵⁶⁾。バフテヤーリーの族長が夏に約一ヶ月のあいだイスファハーンに滞在する慣行もこのころ始めた。

JEの執筆された一八七〇年代、人質としてイスファハーンに定住するようになつた古バフテヤーリーの社会は第三世代にはいっていた。二つの家系が有力者として勢力をもつていた。ひとつは Hājī Kalb'ali Khān の子供たちである。JEは① Āqā Mohammad Ebrāhīm Mallāk' ② Āqā Asadollāh Mallāk' ③ Āqā Hoseyn Mallāk' ④ Āqā

Mohammad Mallāk の四人の名を誌している (JE七四頁)。名前だけで詳細な活動は不明であるが、注目すべきことは四人がいずれも Mallāk と表現されていることである。これは、イスファハーンの市街地の農村化、西部の近郊地域、とくにチャハール・マハールの農業開発の事実とからめて考えれば、古バフテヤーリーの有力者が第三世代を迎えて地主化したことを立証する間接的な証拠となるものである。おそらく、バフテヤーリーの集団が前述したように農業、農作業の日雇い、収穫の手伝いに携わっていたというのは、イスファハーンにおける地主制の成立という全体的な状況のなかで人質集団自体がこの波にのみ込まれた結果であると思われる。

あとひとつ有力家系は Mohammad Qoli Khan に率いられた集団である。かれは一八二四年に反乱を企てた Hajji Hashem Khan の子供であった。JEによれば、イスファハーン州知事の「奴隸軍の百人長 (Yüzbaşılı-ye gholāmān)」をつとめていた (JE七四頁)。その兵舎はボランドの小バーザール (bazzārcheh-ye boland) のなかにおかれていた。この小バーザールはチャハール・バーゲ・シャー・アッバーシーに沿ってあり、ソルターニーのマドラセのすぐ横にあつた。アフガン支配時代以後、この小バーザールはバーザールとして使われていなかつたが、ゼッロル・ソルターンがそれを兵舎に改装したのであつた (NJ五〇頁)。Mohammad Qoli Khan が州知事の近衛兵をしていたことが、バフテヤーリーの人質集団にたいする兵役義務に由来するのか、個人的な私兵にすぎないのかは明らかでない。

一八八二年、バフテヤーリーの族長であった Hoseyn Qoli Khan はイギリスのグレイ・ポール商会の G.S. Mckenzie と武器調達交渉を直接におこなつたといふが、イラン州知事ゼッロル・ソルターンによって暗殺された。⁽⁵⁷⁾ このあとバフテヤーリー族は政治的に分裂し、Ilkhānī Hajji Ilkhānī İlbegi の三つの家系が族長権力を分けあつた。⁽⁵⁸⁾ しかし、一八九八年、イギリスと共同で開発したバフテヤーリー貿易路の完成によってバフテヤーリーの族長層は通橋料を恒常に収入源とすることができなくなつた。このような経済力の向上を背景にバフテヤーリー族は一〇世紀を迎えるとイスファハーンの立憲革命に参加していくことになる。加賀谷寛氏によれば、バフテヤーリー族は一九〇八年末、

イスファハーンの市アンジョマンの応援の要請をうけて武装蜂起した。これ以前に市アンジョマンとバフテヤーリー族とのあいだには直接の交渉がなかつたとされるが、イスファハーンの住民構成のなかで人質として拉致されたバフテヤーリーの定住遊牧民の力が大きことを考へるにかゝらず、今後の課題としてこの集団の立憲革命時における役割を握おこしてこへんことが必要である。立憲革命によつて、こゝにしる、バフテヤーリー族はイスファハーンの支配権を手にするところがられた。Sardār Arshad' Sardār Ja'far' Sardār-e Ashja' が順次、州知事に就任してこへたのである。⁽⁶⁾

以上、私はイスファハーンの地誌とトマベッハーン、住民構成について触れてきたが、一九世紀のイスファハーン像を次のようにおとめなしがであるだひつ。すなわち、市街地の縮少とマハッタの荒廃化とによって市街地の農地化が進行し、同時にバフテヤーリー族をはじめとする遊牧民の集団移住によつてイスファハーンの都市社会はますます、周囲の遊牧社会と関係を深めていったといふことがである。

四

- (37) A. Houtoum-Schindler, *Eastern Persian Irak* (London, 1896), pp. 119-20.
- (38) D. Wright, *The English amongst the Persians during the Qajar Period 1787-1921* (London, 1977), p. 106.
- (39) Houtoum-Schindler, *op. cit.*, p. 120.
- (40) Haydar'adlı Nadim-al-Molk Eṣfahānī, *Tarikh-e Mokhtasar-e Eṣfahān*, in Farhang-e Īrāznamān, XII (Teherān, 1343), p. 146.
- (41) 一曰丸一丸二画。ただし、おもての説明の便向のため遊牧民の集団の順序をこねがえた。
- (42) 加賀谷寛氏は、「イラン立憲革命の性格について（続篇）——イラン近代史とバクテイヤーリー族社会の変動——」（『東洋文化研究所紀要』第三十九輯）、一八八頁において、チャバールマハールの農業復興について触れてゐる。しかし、氏は K. Nikzād の地方誌に拠りつつバクテイヤーリー族の支配によつて一八七〇年代末以降、チャバーレル・マハール地域が荒廃化すると指摘した。荒廃化が事実であったとしても、バフテイヤーリー族がチャバーレル・マハールを含めた西部地域に大土地所有を確立するにいたる、イスファハーンの關係をあくまでも深くする方面を認めたところであらむ。
- (43) Isabella L. Bishop (Bird), *Journeys in Persia and Kurdistan* (London, 1891), Vol. I, pp. 317-18, 321, 325.

(44) ラムーン、前掲書、111頁。

(45) 同前、111頁。L. Bishop, *op. cit.*, Vol. I, p. 297.

(46) ラムーン、前掲書、111頁。

(47) イスファハーン駐在のイギリス領事によれば、アフシャール族はアーガー・ヤヘンマニの時、強制的にイラク(?)、ホラサンからケルマニに移住せられた。一八九四年歿、総1'000のアフシャール族のテントがあり、ケルマン州政府の軍人として活躍していたところ、かねては、例えば、ヤズルからケルマニへ向かうマイルの地点における Anar の面ドナーハの指揮下に約100人' sovār がいた(→Diplomatic and

Consular Reports, No.1376 (Annual Series), p. 24, 34-35.

(48) 加経弘勝、翻訳『アラビア人の脇辺』——アラビア小説の発展と構造と機能——(『現代中東研究』1—11), 111頁。

(49) Reżā Qoli Khān Hedāyat, Rouzat al-Ṣafā-yé Nāṣerī (Tehran, 1339), Vol. 9, p. 249.

(50) Mohammad Ja'far khūrmūjī, *Tārīkh-e Qājār, Haqā-yeq al-Akhbār-e Nāṣerī* (Tehran, 1344), p. 17.

(51) Reżā Qoli Khān, *op. cit.*, Vol. 9, p. 631, JE, p. 74.

(52) Anṣārī, *op. cit.*, p. 249.

(53) G. R. Garthwaite, "The Bakhtiyāri khans, the Government of Iran, and the British, 1846-1915," IJMES, p. 26.

(54) 加賀谷寛、前掲論文、186-187頁。

(55) G. R. Garthwaite, "The Bakhtiyāri Īlkhanī: An Illusion of Unity," IJMES, 8, p. 151.

(56) 加賀谷寛、前掲論文、187頁。

(57) G. R. Garthwaite, *op. cit.*, p. 27.

(58) *Ibid.*, p. 27.

(59) *Ibid.*, p. 30.

(60) 加賀谷寛、前掲論文、1100—○1頁。

(61) L. W. Adamec, *Tehran and Northwestern Iran* (Graz, 1976), pp. 254-55.